様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：３２６３１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２５９６

研究課題名（和文）現代家族の過程と実践をめぐる質的研究に対する組織的取り組み

研究課題名（英文）Organising Qualitative Research on the Process and the Practice of Modern Families.

研究代表者
木戸　功（Kido, Isao）

聖心女子大学・現代教養学部・教授

研究者番号：８０２９８１８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,500,000円

研究成果の概要（和文）：日本家族社会学会の事業である全国家族調査（NFRJ）において質的調査を実施した。NFRJ18質的調査研究会を組織し、先行して実施された量的調査より対象者を引き継いだ上で、101件のインタビュー調査とそのうち8件のフィールドワーク調査を実施した。インタビュー調査では家族にまつわる生活史を中心に対面での聞き取りを行い、フィールドワーク調査では、現在の家族生活の一端をビデオカメラにおさめるという方法でデータを収集した。前者については、音声データを文書化し匿名化を施した上で、協力者の同意を得た上で、研究会メンバーによる利用を開始した。後者については、分析に向けたデータセッションを継続して実施している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
全国家族調査（NFRJ）は、全国規模の定点観測データの構築と、それらのデータを公共利用に供することを目的として実施されてきた。現在のところ、質的調査データの公共利用や二次分析は、日本においては一般的ではなく、環境整備なども進んではいない。しかしながら、社会調査がもつ公共性に鑑み、また、データ分析の妥当性を担保するための一つの方法という観点から、データのアーカイブ化が求められている。これらをふまえて本調査においては、将来的に公共利用することを前提とした計画、設計と実査、およびデータの構築を行った。本調査はデータの公共利用を前提に設計され実施された国内ではおそらく初めての質的調査の取り組みである。

研究成果の概要（英文）：We conducted qualitative research for the National Family Research of Japan (NFRJ), a project of the Japan Society of Family Sociology. The NFRJ18 qualitative research group was organized, and a total of 101 interviews and fieldwork regarding 8 families were conducted with subjects that had been included the previous quantitative survey. Face-to-face interviews focusing on family life history were conducted, and the fieldwork data were collected by means of video cameras that captured aspects of current family life. For the former, the audio data were documented and anonymized, and after obtaining the consent of the interviewees, the data were made available for research by the members of the research group. For the latter, data sessions for analysis are ongoing.

研究分野：家族社会学

キーワード：全国家族調査　家族社会学　質的調査　インタビュー　生活史　フィールドワーク　エスノメソドロジー・会話分析　公共利用

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本家族社会学会の事業である全国家族調査（NFRJ）は、1998 年度の第 1 回調査以来、全国規模の定点観測データの構築と、それらのデータを公共利用に供することを目的として実施されてきた。2018 年度に調査を開始する第 4 回全国家族調査（NFRJ18）において、量的調査に続いて質的調査を実施することが決まり、2015 年より本研究課題にとりくんでいくための準備を開始した。

日本の社会学研究においては NFRJ を含む公共利用が可能なデータを用いた二次分析の成果が、とりわけ量的研究において蓄積されてきた。質的研究については、海外での取り組みが紹介されることはあっても、国内における同様の取り組みはほぼない状態であった。そうした中で、すでに実施された社会調査データを含む、質的調査データのアーカイブ化をめぐる議論が、小林多寿子氏が代表を務める「質的データ・アーカイヴ化研究会」を中心に展開され（質的データ・アーカイヴ化研究会 2014)、これから実施される質的調査においても、将来的な公共利用を前提とした調査のあり方を検討することが一つの課題として浮上してきた。

他方で、日本の家族社会学における質的研究は、2000 年代以降に活発化し、数多くの経験的研究の成果を蓄積してきた。ただし、その多くは個人研究であり、家族の質的研究に携わる多くの者は共同での調査研究の経験に乏しい状態であった。さらに、そうした論文等の研究成果においては、調査の設計、対象選定、実査、記録、データの加工とその管理、そして分析といった調査のプロセスは、十分に明示されてはいなかった。また、どのような理論的立場のもとで、いかなる方法論的立場から質的調査が行われ、そこで収集されたデータが分析されているのかを、明確に示している研究成果も決して多くはなかった。

結果として、理論とデータさらに方法の関係が不明確なまま、質的調査にもとづく研究の成果だけが蓄積されていくことになった。このような状況のもとでは、家族の質的研究に携わる者の間での、研究成果についての相互的、事後的な検証の可能性は低くなると考えられ、またスキルも共有化されにくい。そもそも、多様な質的研究の立場や方法の間に共通する「言語」がないなかで、しかしながら、だからこそ研究の成果をその背景にある理論的・方法論的立場とともに適切に提示する努力はないがしろにしてはならないと考えた（木戸 2017)。

NFRJ18 に質的研究の立場から参画し、共同研究として組織的に質的調査を実施するという試みは、調査のプロセスを共有し、質的研究に携わる者相互の連携をうながすとともに、量的研究への理解を促進するという意義があると考えた。さらにいえば、将来的な公共利用を見据えたデータ構築により、日本における質的調査データのアーカイブ化に関して、一定の貢献ができるのではないかと考えた。こうして NFRJ18 質的調査研究会を組織し、本研究に臨んだ。

２．研究の目的

本研究においては「現代家族における過程と実践」を基本テーマとして設定した。より具体的には、調査協力者の現在までの家族生活・家族関係の形成過程を把握すること、つまり出生以降のライフイベントに沿って、現在のまでの家族をめぐる生活史を把握すること、さらにそれをふまえて、協力者の現在の家族生活・家族関係を構成している実践の詳細を把握すること、このようにして現代家族の実態を質的調査によって把握することを目的とした。本調査におけるリサーチ・クエスチョンは、「①どのように家族生活・家族関係が形成・維持されてきた／されているのか」、そして「②家族は／で何をしているのか」、このように整理することができる。

前者に関しては半構造化面接法を用いた調査を実施しナラティブ・データを収集した。また後者に関しては、調査協力者の現在の家族生活・家族関係を構成している具体的な実践の詳細を把握するために、フィールドワーク調査を実施した。主としてエスノメソドロジー・会話分析の手法を用いて、食事や団らん、レジャーなどの録画記録を収集した。このように本プロジェクトにおいては将来的には公共利用を可能とすることを見据えた調査を計画・設計し、実査を通じて 2 種類のデータを収集した。

３．研究の方法

半構造化面接法を用いた対面によるインタビュー調査と NFRJ18 においては 3 つ目の調査となるフィールドワーク調査を実施した。後者については、結果として調査協力者のご自宅にビデオカメラを預け、団欒の様子などを記録してもらうという方法でデータを収集した。

・インタビュー調査の協力者の選定

インタビュー調査は、NFRJ18 質的調査研究会メンバーの問題関心に応じて 4 つの研究班に分かれて調査に臨んだ。すなわち、多様性班、家族と高齢者班、子育て班、結婚・ワークライフバランス（WLB）班である。2019 年に先行して実施された量的調査の最後の設問において、インタビュー調査への協力を依頼したところ、回答者 2,907 名のうちで、「協力を前向きに検討したい」という回答が 275 名、「内容によっては協力を検討してもよい」という回答が 954 名得られた。前者については全員を、これに後者から選定された 355 名を加えて 630 名を第一次依頼の対象者とみなした。後者の選定にあたっては、研究班ごとに対象とする協力者の条件を検討した。多

様性班は、いくつかの条件を設定し、できだけ多様な家族をめぐる経験をもつ方を選定した。具体的には配偶者との離死別経験、事実婚、性別違和に加えて、同性パートナーを持つ方、継養親を持つ方、異父母のきょうだいを持つ方という条件を設定した。家族と高齢者班は 1968 年以前生まれの方を対象とした。子育て班は、調査時点で 28 歳から 50 歳までの女性で、15 歳までの子どもがおり、親（義理の親を含む）と同居していない方という条件を設定した。最後に結婚・WLB 班は、夫婦がともに就業しており、中学生までの年齢の子どもがおり、都市部在住の方という条件を設定した。

郵送で行った第一次依頼に対する回答は同封したハガキに加えてインターネットのフォームからも受け付けた。327 名から回答が得られ、そのうち調査に「協力してもよい」との回答が、葉書 155 名、フォーム 89 名であった。一部重複があり、実人数で 214 名から応諾が得られた。応諾者の居住地なども勘案しながら候補を絞り込むことで、結果として多様性班 26 名、家族と高齢者班 28 名、子育て班 27 名、結婚・WLB 班は子育て班の応諾者も含みながら 28 名を選定し、2019 年 7 月より第二次の依頼を行った。第二次依頼は実査を担当するメンバーが行い、調査の場所や日程の調整も合わせて行われた。最終的に 101 件の調査が可能となった。

・インタビュー調査の項目

すべての調査協力者に共通する家族にまつわる生活史の項目として、基本的な経歴（出生以来の居住地の経歴、学歴、職業経歴、子どもの頃の家族構成、当時の両親の職業、現在の家族構成）に加えて、①定位家族について、②定位家族から生殖家族への移行、③生殖家族について、④家族をめぐる転機を設定した。これに研究班ごとに設定した項目を加えた。

多様性班は、非初婚継続家族にまつわる経験について、たとえば、離死別、再婚などのライフイベントやひとり親としての経験について聞いた。加えて、同性パートナーとの関係、継養親や異父母のきょうだいとの関係についても聞いた。

家族と高齢者班は、成人後の親（義親を含む）との関係、きょうだい関係に加えて、家族介護について聞いた。また、電化製品にまつわるエピソードも調査項目として設定した。さらに余暇、趣味、学習、地域活動に対する関心から現在および今後の社会参加活動について聞いた。

子育て班では、妊娠から出産に至るプロセス、さらに仕事との関連についてより詳しく聞いた。出産以降に関しては、子育ての体制、方針、ストレスに加えて、育児休業、仕事との両立、専業主婦としての経験について聞いた。これら以外には、保育サービスの利用、子育てにかかるお金、子どもの成長に伴う家族の変化、定位家族における経験との比較などを項目として設定した。

結婚・WLB 班では、夫婦関係に照準する項目を細かく設定した。とくに仕事との関連において、配偶者の状況、子どもについて、家事や育児の役割分担、加えて結婚当時のエピソードや日常的な夫婦関係について、とりわけ愛情にまつわる項目をより詳しく設定した。その上で、就業継続している女性、就業を再開した女性、そして男性という対象ごとに主として仕事や家事・育児との関わりにおいて夫婦関係をとらえるための項目を設定した。

・フィールドワーク調査

インタビュー調査に際して、協力者に「暮らしの記録調査」と命名したフィールドワーク調査の内容を説明し、調査への協力の意向をたずねた。結果的に 8 世帯の家庭の様子をビデオカメラで収録することができた。3 ヶ月ほどの短期間で調査を終了したケースもあるが、1 年以上カメラを預け長期間の調査となったケースもある。

４．研究成果

インタビュー調査に関しては、個人情報等の秘匿化加工を施したナラティブ・データと調査場面や担当者の情報などを記録したメタデータをそれぞれのケースごとに整理し、2021 年 2 月の時点で 74 ケースのデータセット（NFRJ18 インタビューデータ ver．1）を作成して NFRJ18 質的調査研究会内部での共有と利用を開始した。その後もデータの整備を続け、現在のところ 79 ケースが共有されている（同 ver．1.1）。さっそく研究会メンバーによる研究利用が開始され（開内 2021）、本データセットを用いた論文も発表された（吉原 2021a）。また、9 月には研究代表者がオーガナイザーとなり、第 31 回日本家族社会学会大会においてテーマセッション「全国家族調査 18 質的調査にもとづく成果報告」を運営し、研究会メンバーによる本データセット用いた 4 つの報告がなされた（安藤 2021，吉原 2021b，里村 2021，須長 2021）。その後も研究利用がつづくとともに（田中 2021）、2021 年 11 月には一般社団法人社会調査協会によるシンポジウム「質的調査データ構築の新たな挑戦」において、本調査研究の取り組みについて報告した（木戸・戸江 2021）。さらに 2022 年 3 月に刊行された『社会と調査』の特集「家族のリアリティを調査する 工夫・成果・課題」にも原稿を寄せた（木戸・戸江・松木 2022）。

現在は、研究会メンバーによるデータ利用の促進を図るとともに、成果の一つとして、2023 年度中に書籍の出版に向けたとりくみも進行している。フィールドワーク調査については、オンラインでのデータセッションを継続し、収集したケースと分析のためのアイデアの共有を続けている。

文献

安藤藍，2021,「離婚および離婚後の生活の語られ方」（第 31 回日本家族社会学会大会 テーマセッション(３)「全国家族調査 18 質的調査にもとづく成果報告」2021 年 9 月 5 日開催）
開内文乃，2021,「全国家族調査質的調査における家族の呼称について：子育て中の女性の事例」（日本語ジェンダー学会第 1 回オンライン研究会 2021 年 2 月 13 日開催）
木戸功，2017,「家族社会学と質的研究」藤崎宏子・池岡義孝編『現代日本の家族社会学を問う――多様化のなかの対話』ミネルヴァ書房：199-211.
木戸功・戸江哲理，2021,「質的調査の新たな取り組み：全国家族調査における質的調査」（一般社団法人社会調査協会シンポジウム「質的調査データ構築の新たな挑戦」2021 年 11 月 20 日開催）
木戸功・戸江哲理・松木洋人，2022,「全国家族調査における質的調査のとりくみ」『社会と調査』28：27-34.
里村和歌子，2021,「子育て主婦とキャリアの見通し」（第 31 回日本家族社会学会大会 テーマセッション(３)「全国家族調査 18 質的調査にもとづく成果報告」2021 年 9 月 5 日開催）
質的データ・アーカイヴ化研究会，2014,『質的データ・アーカイヴ化とリサーチ・ヘリテージ』（2011-2013 年度科学研究費研究成果報告書）.
須長史生，2021,「社会問題としての男性の家事参加」（第 31 回日本家族社会学会大会 テーマセッション(３)「全国家族調査 18 質的調査にもとづく成果報告」2021 年 9 月 5 日開催）
田中慶子，2021,「家族関係の悪さをどう語るか：NFRJ18 より」（日本家政学会家族関係学部会家族関係学セミナー 2021 年 10 月 9 日開催）
吉原千賀，2021a，「成人期のきょうだい関係と家族―NFRJ18 きょうだいダイアドデータによるマルチレベル分析―」『高千穂論叢』56(1)：95-117.
――――，2021b,「成人期のきょうだい関係と家族：全国家族調査 18 質的調査データによるアンビバレンス概念を用いた分析」（第 31 回日本家族社会学会大会 テーマセッション(３)「全国家族調査 18 質的調査にもとづく成果報告」2021 年 9 月 5 日開催）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 木戸功	４．巻 33(2)
２．論文標題 NFRJ18質的調査の概要――インタビュー調査を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 家族社会学研究	６．最初と最後の頁 223-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松木洋人	４．巻 45
２．論文標題 自分の婚外性愛についての相談／回答はどのように成し遂げられるのか：新聞紙上の人生相談記事を題材とした探索的考察	５．発行年 2020年
３．雑誌名 家族研究年報	６．最初と最後の頁 79-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 松木洋人	４．巻 531
２．論文標題 「幼児教育・保育の無償化」という虚構と「生活を協同すること」の意味	５．発行年 2020年
３．雑誌名 生活協同組合研究	６．最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 木戸功・戸江哲理・松木洋人	４．巻 28
２．論文標題 全国家族調査における質的調査のとりくみ	５．発行年 2022年
３．雑誌名 社会と調査	６．最初と最後の頁 27-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松木洋人	4．巻 44
2．論文標題 岩上真珠の軌跡からみる戦後日本の家族社会学――ライフコースという到達点と家族をめぐる「消失の物語」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 家族研究年報	6．最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 永井暁子・鈴木富美子・知念渉	4．巻 21（2）
2．論文標題 NFRJ18予備調査からわかる調査協力意向の傾向	5．発行年 2019年
3．雑誌名 家族社会学研究	6．最初と最後の頁 190-196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4234/jjoffamilysociology.31.190	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 戸江哲理	4．巻 45
2．論文標題 家族「する」ことの研究とエスノメソドロジー・会話分析――会話分析的研究Embodied Family Choreographyの家族社会学的意義	5．発行年 2020年
3．雑誌名 家族研究年報	6．最初と最後の頁 97-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松木洋人・中西泰子	4．巻 43
2．論文標題 家族研究と政策提言――少子化対策に焦点を当てて	5．発行年 2018年
3．雑誌名 家族研究年報	6．最初と最後の頁 1-4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松木洋人	4．巻 33
2．論文標題 配偶者の婚外性愛についての相談に対する回答を可能にする規範的論理――新聞紙上を人生相談を題材とした探索的分析	5．発行年 2019年
3．雑誌名 比較家族史研究	6．最初と最後の頁 2-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 阪井裕一郎	4．巻 43
2．論文標題 脱家族化と再家族化少子化対策の正当性について	5．発行年 2018年
3．雑誌名 家族研究年報	6．最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松木洋人	4．巻 68(1)
2．論文標題 家族社会学における構築主義的アプローチの展望：定義問題からの離脱と研究関心の共有	5．発行年 2017年
3．雑誌名 社会学評論	6．最初と最後の頁 25-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松木洋人	4．巻 29(1)
2．論文標題 家族介入にとっての家族社会学／家族社会学にとっての家族介入	5．発行年 2017年
3．雑誌名 家族社会学研究	6．最初と最後の頁 77-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 松木洋人
２．発表標題 NFRJ18質的調査の対象と思想
３．学会等名 日本家族社会学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木戸功
２．発表標題 NFRJ18 質的調査の実施状況と今後の計画
３．学会等名 日本家族社会学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 木戸功・永井暁子
２．発表標題 NFRJ18プリテストによる成果とNFRJ 質的調査グループの活動
３．学会等名 日本家族社会学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 阪井裕一郎
２．発表標題 家族をめぐるリベラルの内なる対立：家族概念の再検討へ
３．学会等名 シノドス国際社会動向研究所研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 KIDO Isao
２．発表標題 Life Course Construction through Talking about Motivation: Rural Migration and Adaptation.
３．学会等名 Society for the Study of Social Ploblems 2017 Annual Meeting（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

１．著者名 日本家政学会、久保　桂子、佐藤　宏子	４．発行年 2018年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 224
３．書名 現代家族を読み解く１２章	

１．著者名 平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編	４．発行年 2018年
２．出版社 ひつじ書房	５．総ページ数 286
３．書名 会話分析の広がり	

１．著者名 藤崎宏子、池岡義孝編著、小玉亮子、井口高志、岩間暁子、千田友紀、廣嶋清志、保田時男、稲葉昭英、木戸功、米村千代、渡辺秀樹、牟田和恵著	４．発行年 2017年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 304
３．書名 現代日本の家族社会学を問う	

１．著者名 永田夏来、松木洋人編	４．発行年 2017年
２．出版社 新泉社	５．総ページ数 240
３．書名 入門　家族社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

全国家族調査（NFRJ）
https://nfrj.org
http://nfrj.org/nfrjqualwg.htm

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	松木　洋人 (Matsuki Hiroto) (70434339)	大阪市立大学・大学院生活科学研究科・准教授 (24402)	
研究分担者	戸江　哲理 (Toe Tetsuri) (10723968)	神戸女学院大学・文学部・准教授 (34510)	
研究分担者	安達　正嗣 (Adachi Masatsugu) (20231938)	高崎健康福祉大学・健康福祉学部・教授 (32305)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　富美子 (Szuki Tomiko) (50738391)	東京大学・社会科学研究所・准教授 (12601)	
研究分担者	阪井　裕一郎 (Sakai Yuichiro) (50805059)	福岡県立大学・人間社会学部・講師 (27104)	

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	石黒　史郎 (Ishiguro Shiro)		
研究協力者	三品　拓人 (Mishina Takuto)		
研究協力者	岩下　好美 (Iwashita Yoshimi)		
研究協力者	開内　文乃 (Hirakiuchi Fumino)		
連携研究者	永田　夏来 (Nagata Natsuki) (40613039)	兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授 (14503)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	須長　史生 (Sunaga Fumio) (80349042)	昭和大学・富士吉田教育部・准教授 (32622)	
連携研究者	笠原　良太 (Kasahara Ryota) (20846357)	早稲田大学・総合人文科学研究センター・招聘研究員 (32689)	
連携研究者	高丸　理香 (Takamaru Rika) (00802000)	静岡大学・国際連携推進機構・特任准教授 (13801)	
連携研究者	安藤　藍 (Ando Ai) (20750441)	千葉大学・教育学部・准教授 (12501)	
連携研究者	金　恵媛 (Kim Hyeweon) (60405529)	山口県立大学・国際文化学部・教授 (25502)	
連携研究者	知念　渉 (Chinen Ayumu) (00741167)	神田外語大学・グローバル・リベラルアーツ学部・講師 (32510)	
連携研究者	里村　和歌子 (Satomura Wakako) (70837955)	九州大学・比較社会文化研究院・特別研究者 (17102)	
連携研究者	水嶋　陽子 (Mizushima Youko) (00326802)	常磐大学・人間科学部・教授 (32103)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	磯部　香 (Isobe Kaori) (30786158)	高知大学・教育研究部人文社会科学系教育学部門・講師 (16401)	
連携研究者	藤間　公太 (Toma Kota) (60755916)	国立社会保障・人口問題研究所・社会保障応用分析研究部第2室・室長 (82628)	
連携研究者	大森　美佐 (Omori Misa) (20833388)	東京家政大学・家政学部児童教育学科・期限付助教 (32647)	
連携研究者	吉原　千賀 (Yoshihara Chika) (00362830)	高千穂大学・人間科学部・教授 (32637)	
連携研究者	田中　重人 (Tanaka Sigeto) (60294013)	東北大学・文学研究科・准教授 (11301)	
連携研究者	苫米地　伸 (Tomabechi Shin) (80466911)	東京学芸大学・教育学部・教授 (12604)	
連携研究者	久保田　裕之 (Kubota Hiroyuki) (40585808)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	
連携研究者	牧　陽子 (Maki Yoko) (50802451)	上智大学・外国語学部・准教授 (32621)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	田中　慶子 (Tanaka Keiko) (50470109)	慶應義塾大学・経済学部（三田）・特任准教授 (32612)	
連携研究者	本多　真隆 (Honda Masataka) (60782290)	明星大学・人文学部・准教授 (32685)	
連携研究者	志田　哲之 (Shida Tetsuyuki) (00880436)	早稲田大学・人間科学学術院・講師（任期付） (32689)	
連携研究者	木下　衆 (Kinoshita Syu) (00805533)	慶應義塾大学・文学部（三田）・助教 (32612)	
連携研究者	齋藤　直子 (Saito Naoko) (90599284)	大阪市立大学・人権問題研究センター・特任准教授 (24402)	
連携研究者	角　能 (Kado Yoku) (50731303)	島根県立大学・地域政策学部・准教授 (25201)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関